項羽と劉邦

上

司馬遼太郎

新潮文庫

項羽と劉邦（上）

新潮文庫　し-9-31

昭和五十九年九月二十五日　発行
平成八年二月二十九日　四十四刷

著者　司馬遼太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話編集部（〇三）三二六六-五四四〇
読者係（〇三）三二六六-五一一一
振替　〇〇一四〇-五-八〇八
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社

© Ryôtarô Shiba 1980 Printed in Japan

新潮文庫

項羽と劉邦

上巻

司馬遼太郎著

新潮社版

3260

項羽と劉邦

上巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

始皇帝の帰還

秦の始皇帝、名は政、かれが六国を征服して中国大陸をその絶対政権のもとに置いたのは、紀元前二二一年である。それまでこの大陸は、諸方に王国が割拠し、つまりは分裂している状態こそ常態であるとされてきた。統一の方が異常であったといっていい。

「――あんなやつが」

皇帝か――と、その在世中、巡幸の途次かれを路傍で見た多くの者がおもったのは、かれによってほろぼされた国々の遺民としての感情もあったであろう。しかし一方、かれが中国を統一するというばかげた、いわば絵空事のようなことを現実にしてしまったことが、ひとびとにかえっていかがわしさを感じさせる結果になった。第一、皇帝ということばそのものが新語であり、かれ自身が創作した。言葉がまだ新しくて熟していないのに、実体である皇帝に対する尊敬心の習慣が根づいているはずがなかった。

かれ以前、地上に君臨する者として、国々に王というものがいた。貴族もいた。ところが、

かれはそれらの王制や貴族制を一挙に廃してしまった。以前は、人民はうまれながらに人民であり、さらには、うまれながらの王や貴族を氏神に似たものとして尊敬し、その天賦の地位を人民は窺おうとはしなかった。それでもって、なんとか大地は治まっていた。ただ大飢饉があると人民どもは群れをなし、食をもとめて流浪し、王や貴族をかえりみなかった。それだけのことであった。

始皇帝は、なんとなく統治し統治されているという過去のあいまいな制度のすべてを一掃した。それにかわるに、中央集権というふしぎな機構をもちこみ、大網のように大陸にひろげ、精密な官僚組織の網の目でもってすべての人民をつつみこもうとした。包みこみの原理は、法であった。法をもって刑罰や徴収、労役などすべてが運営され、強制されるなどは、いままでこの大陸の人間たちが経験しなかったものだった。もっとも、かつて辺境にあったかれの秦王国の人民だけはそれを経験してきた。要するに征服国である秦のやり方が、この大陸のすみずみに及ぼされた。

「王たちの時代はおわり、すべてが秦になった」

ということの煩瑣さは、未経験の中原の人民どもには耐えがたい。法のうるささだけでなく、官僚的権力者をどう尊敬していいのか、過去に伝統がないだけにみなとまどった。

皇帝だけが、この地上におけるただ一人の権力者だということだけはひとびとに理解できた。皇帝一人が官僚組織をにぎり、それを手足のようにつかい、すべてを皇帝自身が裁決し

ているということである。権力を世襲するのも皇帝家だけしか認められない。貴族というあいまいな中間階級が消滅した以上、皇帝一人が、じかに人民という海のようなものに対しているに似ていた。言いかえれば、一本の釘に皇帝がぶらさがっているだけで、あとはすべて人民のみという風景になってしまっている。

（つまりは、皇帝を倒せば、倒した者が皇帝になれるということではないか）

という奇抜な、しかしあたりまえの、ともかくも前時代にはなかったふしぎな政治認識を多くの人民に植えつけてしまったことは、当のこの制度の創始者自身は気づかなかったにちがいない。

この皇帝制度の創始者は、ひどく土木事業を好んだ。人民という人民がかれの宮殿の普請か、かれの生前墓の建設工事か、または辺境の匈奴をふせぐための長城の工事か、あるいは首都咸陽から八方に通じている皇帝専用道路の工事かにかりだされていたが、そういう土工のなかに陳勝という者もいた。のちかれが仲間の土工たちをあおって皇帝をたおすべく反乱に立ちあがったとき、おびえる人民どもを叱咤して、「王になるのも侯になるのもみな思いのままの世の中ではないか」（王侯将相寧ンゾ種アランヤ）という有名な文句を吐いたが、これは厳密にはかれだけの独創ではない。加害側の始皇帝も加わっている。始皇帝がつくりあげた前例のない政治空間がなければ、陳勝がむちをあげ、大地をたたき、この名文句を吐いても、土工たちはどよめかなかったであろう。

皇帝一個が、中間勢力なしに宇内のすべての人間――中国の人口は五千万と想像される――に対しているというのは、自信家の始皇帝にとっても多少の不安と肌寒さがあった。だかれは組織でうずめようとせず、装飾でうずめようとした。自分一個の存在を厳重に装飾し、いやがうえにも絶対であることを見せようとした。かれは皇帝という称号もつくったが、かれのみが用いる一人称も制定した。自分のことを、

「朕」

とよんだ。一人称を専有したのである。

さらには、皇帝が中国のすみずみに行くために専用道路をつくったのも、ただ一人の存在としての装飾のために重要であった。かれがとほうもない道路網をつくったのは、ほぼ同時代に遠いローマ世界で軍用道路が完成されていることと無縁でないかもしれない。東西のあいだに正規の交通はなかったが、あるいはうわさがつたわってかれの発想が成立したのかとも思える。その舗装はローマ道路ほどの重厚さをもっていないにしても、礫を敷きつめ、その一つずつを路面にたたきこむという入念な工事だった。礫の一つ一つは、人夫が地面にしゃがみこんで小さな槌で一つずつ打ちこんでゆくというものであり、その労苦とこの道路網の長大さとを思いあわせると、そこに動員された人夫の数がどれほどぼう大なものであったかが想像される。

「ただ一人が、億兆の人間を所有している」

というかれの権力思想は、具体的には無数の人間をそれらの郷村から追い出して土工にしてしまうということでもあった。そのほか、ごくささいな理由で多数の人民を虐殺してみせるということにおいても示された。たとえば、あるとき隕石が落ちた。その隕石に始皇帝にとって不吉な文字が書かれていたために、かれは犯人をしらべさせた。が、ついにわからず、このためかれはその隕石が落ちた付近の人間をことごとく殺してしまった。

「殺せ」

と、勅命をくだすだけで、その役人たちは殺す。べつにかれにとって暴虐という意識はない。

「皇帝というのは、こういうことができる存在なのだ」

と、かれはおもっていた。

かつての斉王や燕王、楚王といったふるぼけた貴族権力とはまったくちがっている、ということを、かれは事実をもって示さねばならず、言いかえればただ一人でもって億兆の人間どもに対っているにはこういう権力の示威の仕方しかないと肚に据えてかかっているようでもあった。

これらの虐殺は、かれの他の統一事業と、基本の思想として一つのものであった。それまで文字が地域によって異同があったが、かれはそれらの多くを捨て、整理し、漢民族の使う文字を一種類にした。度量衡も地域によってまちまちであったのを、一つのものにした。まことに皇帝は多忙であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

かつての秦王である政は、皇帝になってから十年そこそこしか生きなかった。このみじかいあいだに、かれはさまざまのことをしなければならなかった。そのもっとも重要な事業の一つは、天下を巡幸して彼自身の顔を人民どもに見せてまわるということであった。この点、かれは、歴史的経験をへた後世の皇帝たちよりも、皇帝として不馴れであったということがいえるであろう。たとえば後世の皇帝なら帝都の宮殿を荘厳にし、百官百姓を礼をもって縛り、皇帝がいかに尊貴なものであるかを示すだけでよかった。そのために礼教の学である儒教が作動した。しかし始皇帝は最初の皇帝であるために、自分を居ながらに荘厳にしてくれる儒教の使いみちを知らず、逆に儒教を禁止し、儒書を焼きすてさせたほか、儒者四百六十余人を生きながらに坑に埋めた。

ともかくも、かれは皇帝がいかに偉大であるかを示すのに、自分自身で普天のもと、率土のはてまで巡幸して見せてまわらねばならなかった。

この巡幸は、しばしばおこなわれた。巡幸することがかれにとって最大の政治事業のようであった。ついには巡幸の途上で病死してしまうほどに熱心だった。巡幸には、華麗に武装した何十万という軍隊が、秦帝国の皇帝色である黒の旌旗を無数になびかせ、無数の金属製の兵器を陽にきらめかせ、この世のおそろしさとこの世のおごそかさを最大限に演出してみせた。奥地ははるか西方の隴西へ行った。東のほうは黄河流域につらなる主要都市をへめぐって山東半島の之罘山（いまの芝罘）まで行ってそこからはじめて海を見、あるいは琅邪台を

ゆき、内陸の彭城（いまの徐州）を通り、さらに、はるかに南下して揚子江のほとりに出て要衝をめぐりあるくというものであった。かれの政権そのものが動いてゆくために、扈従する文官の数もおびただしかった。

かれ自身は、つねに車輛に乗っていた。車輛は小さな宮殿のように装飾がほどこされていたが、どういう技術者が設計したものか、多くの窓を自然に開閉することによって車室の中の寒暑を調節することができた。この車は、特別な名でよばれた。

「轀輬車」

という。轀も輬も、この車のために文字がつくられたのではあるまいか。

巡幸の行列が都邑に入ると、群衆が両わきに殺到した。群衆は、後世のように礼教で飼いならされていないために皇帝を拝跪するということをせず、ただ物見高くむらがるだけであった。こういう場合、始皇帝はかれらに顔を見せてやるために、わずかに轀輬車の窓をあけさせたりした。

「この地上で、はじめて大地を代表する皇帝というものがあらわれ出た。顔をありがたく拝んでおくがよい」

と、この男は、顔をみせてまわった。

「あの男が、皇帝を称する政か」

と、無頼の者などは、対等の意識でかれの横顔を見た。かれは自分の顔を情熱的に見せて

まわったために、のちにかれの政権をたおして皇帝の地位につくべく起ちあがった連中のたいていは、それぞれの郷土やそれぞれの作業現場においてかれの顔を識っていた。かれこそいい面の皮であった。その顔を識られたとき、識ったたれもが、「この男さえたおせばおれがこの男になれる」とおもった。皇帝という存在が貴族制度や礼教思想でもって鎧われていなかったために、そういうあんちょくな思いを野望家たちにもたせた。後世の皇帝制からみれば信じがたいほどの心理的事情であったが、しかし「皇帝」の発明者である嬴政（始皇帝の姓と名）にとって、後世のかれの同業者のように豊富な歴史的経験をもつことができない。創始者としてのうかつさはやむを得なかった。

たとえばのちの反乱者たちのなかで、沛の劉邦の場合は、咸陽の都の街路でこの皇帝を目撃した。このとき劉邦は始皇帝の土木事業の労役に従事していた。ある日、たまたま地上最大の権力が道路上をしずしずと移動してゆくのを見、その壮観に打たれた。感動したのではなかった。劉邦は大きく息を吐いてから、大丈夫、当ニ此ノ如クナルベキナリ――男はこうなきゃだめだ――とつぶやいたのである。劉邦は皇帝に対して無用に戦闘的な抵抗心はもたず、ただむやみにくびをふってうらやましがった。このあたりは、いかにも劉邦らしい。

一方、項羽は、華南の会稽で始皇帝の巡幸に出遭った。かれは群衆とともに見物した。華麗な轀輬車が近づくや、

「彼取ッテ代ルベキナリ」

と、大声で叫び、同行していた叔父の項梁を狼狽させた。かれのこのさけびは『史記』に出ている。由来、トッテカワルというのは、日本語にまでなった。項羽にとって本音であった。項羽の強烈な自負心からいえば、皇帝の車に乗って皇帝の衣服を着ている嬴政というしわ深い男になんの力も価値も感じなかった。始皇帝はたまたま秦の王家にうまれ、王になった。劉邦のような土民ではなく、項羽のような浪人同然の境涯でもない。秦は中国大陸の西北角にあり、半農半牧の非漢民族が雑居している。これらを統御するには法律と刑罰と鞭による統制主義による以外になく、秦は早くからその方式を採用し、法家の国とされた。秦は中原に熟成しつつあったような人文には乏しかったが、そのかわり、西方の遠い道からつたわってきている鉄や銅、あるいは真鍮の冶金が上手で、地をふかくうがつ農具も、するどい兵器も他の六国（楚、斉、燕、韓、魏、趙）にくらべてはるかに豊富であった。

右のように、秦がもつ統制主義と生産力と兵器の優越が、この国をして他の六国を凌がせ、秦王政にいたり、やがて六国をほろぼして、奇跡としか言いようのない大陸の統一を遂げさせた。政は運がよかっただけだ、という見方を、土工として江湖に流浪している六国の遺民たちに植えつけた。元来、旧六国の遺民たちは秦を野蛮国と見、漢民族の血液が薄いと見て軽侮していた。軽侮されてきた国の王が皇帝になったところで、劉邦や項羽ならずとも神聖視しなかった。

始皇帝にも、そのことがわかっている。だからこそ人民どもの肝をとりひしぐような巨大な建造物を各地で造営し、また行列をつらねて、皇帝としての自分の顔を見せてまわる必要があった。しかし顔を見せてまわることは、かえって効果が逆になった。劉邦や項羽のような手合いの野望を刺激し、挑発してまわるという奇妙なはめになった。

巡幸には、始皇帝のべつな願望もその目的に組み入れられていた。

人間を宿命づけている老と死という自然の変化からまぬがれたいということだった。万能の皇帝ならばそのことは可能だとかれは考えていた。かれは人文の稀薄な西北の辺疆の人だけに瑣末な文化意識にわずらわされることがなく、かえって合理主義的な思考法をとることができたし、おなじ理由で、一種の科学主義者でもあった。この気分のなかで、かれは方術を信じた。方術はこの当時にあっては科学というにひとしく、またその体得者である方士が、のちの科学を語るようにして神仙を語った。始皇帝はかれらに不老不死の霊薬をさがすことを命じ、これがために万金を散じた。散じつづけた。

「よい薬をつくれ」

と、方士たちをせきたてた。

かれらが調製するものをさかんに服用した。どうやら水銀のようなものまで服んでいた形跡があった。おそらく内臓がぼろぼろになるまでその影響が溜まりに溜まっていたにちがいない。

方士のなかでは、とくに盧生という者を信じていた。盧生は、「天上で神仙とつきあっている」という評判があった。

「盧生、にせ方士の多いなかで、そのほうだけを信じている。神仙をつれて来い」

と、かれはつねに言い、かつ一方で、盧生が怠けているのではないかと思い、叱りもした。

「神仙はかならず陛下のもとに参ります」

と、そのつど盧生はたのもしく返答した。

そのときこそ神仙が陛下に不死の薬を献ずるでありましょう、ともしばしば盧生は約束した。しかし一向に神仙が始皇帝の部屋に舞いこんでこなかった。盧生は窮してしまい、それは陛下の生活のありかたがよくないからでございます、とひらき直った。神仙は余人を嫌う。陛下の部屋に舞い降りようにもたえず家来どもがいて舞い降りられないのでございます、という意味の理屈を整然たる理論と実証をもって述べた。合理主義者である始皇帝はもっともであると思った。

以後、余人を身辺に近づけなくなった。咸陽の宮殿には殿舎が二百七十棟もある。その宏大な宮廷のどこにかれがいるかも、余人に知らせないようにした。ただ宦官の趙高だけは例外であった。例外を設けておかねば皇帝としての仕事ができなかった。趙高が府中から政治に関する書類を宮中のかれのもとに運んでくる。決裁を乞うためであった。決裁が済むとそれらの書類を政府である府中まで運んだ。府中を主宰するのは丞相である。高名な李斯がそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton